

橘木俊詔著「実学教育改革論―頭一つ抜ける人材を育てる―」日本経済新聞出版社 2014年9月10日刊を読む

## 若者はどうすればよいか

ここでは若者に特化してどのような人生を送ればよいかを考えてみよう。

1. (1)人は働かなければ食べていけない、という鉄則を再認識したい。
  - (2)親や社会に頼るよりも、自分が働いて稼いだお金で食べるのが自然である。
  - (3)親からの支援には親はいずれ年をとるので限度があるし、社会からの支援はその財源を拠出する人の犠牲を強いるからである。
2. (1)ただし、働くことは苦痛を伴うことが確実なので、働いて自分で食べていける最低水準の確保ができるなら、自分の判断でほどほどに働くのか、それともそれ以上働くか働かないかを決めてよい。
  - (2)もしほどほどに働くことを決めたなら、企業や役所で出世したいという気を持つべきでないし、高い所得や高い消費を望むことは不遜なことである。
  - (3)一方、働くことに苦痛を感じない人はどんどん働いてよい。
  - (4)これらの人は経済成長に大いに貢献するし、その報酬として高い所得を稼ぐことは当然なことである。
  - (5)一生懸命働かない人は頑張っている人の高い所得を妬むことは許されない。
3. (1)最低限働ける人になれるようにと社会は教育、訓練を施すことになっているが、この教育・訓練に積極的に参加してほしい。
  - (2)しかし学問・勉強嫌いな人は必ずいるのであり、そういう人は技能・技術の習得にもっと特化してよい時代となっている。
4. (1)自分がどのような仕事に就くことが最もふさわしいのか、学校教育時代と職に就いてからしばらくの間に、時間をかけて考えてほしい。
  - (2)もしそれが不明なときは、先生、先輩、同僚、友人、親などに積極的に質問してアドバイスを求めてよい。

(3)万が一今就いている仕事が不相当とわかれば、あっさり転職してよい。

(4)特に学校を卒業してから働き始めての数年間はそれが許される。

(5)そして自分に最適の仕事、企業に遭遇すれば幸せなことであるし、できればそれを続けたい。

5. (1)高校、大学時代にアルバイトをすることは、学業の妨げになるからやらないほうがよい、との声もあるが、私はアルバイトに明け暮れしない限りやってよいと考えている。

(2)その理由は、第一に、仕事や職場のこと、労働条件のことなどの経験を積むことは、学校卒業後に本格的に働き始める際に役立つ。すなわち、働くというこれからの人生への序曲となるからである。

(3)第二に、親の経済負担を少しでも和らげるために、所得を自分で稼いで学費に充てることに意味はある。

(4)なぜ第一の理由が大切であるかを補足しておく、学生アルバイトの多くは、単純作業で賃金も安い仕事である。このように比較的労働条件の恵まれない仕事に従事している人が世の中のまわりには多くいるのだ、ということを知ることは、人生観の形成のためをはじめとして、大いに有益と思うからである。

6. 学生時代に働くことの意味を学んでおこう。これは法学、経済学や経営学という座学であってもいいし、実地での経験でもよい。

P218 ~ P220

[コメント]

橘木(たちばなき)先生の教育改革論の最終章にある若者への提言。教養・学問も大切だが、仕事に就く力を身に着ける力を学校時代から育むことも大切であることがよくわかる好著。是非、御一読を。

— 2014年10月8日 林 明夫記 —